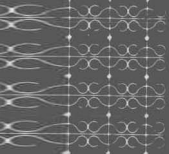


釋迢空短歌綜集

釋迢空短歌綜集



釋しやくてうくうたんかそうしよ逍空短歌綜集

昭和六十二年十月十五日 初版印刷
昭昭六十二年十月二十八日 初版発行

著者 折口信夫
をりくちしのぶ

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二二三一二
電話四〇四一・二〇一（営業）
四〇四一八六一（編集）

振替口座（東京）〇一〇八〇二

印刷 大日本印刷

製本 大日製本

定価は函・帯に表示してあります

落丁・乱丁本はお取替えいたします

©1987 Printed in Japan

ISBN4-309-00476-8

目次

海やまのあひだ

五

春のことぶれ

一〇二

水の上

二六九

遠やまひこ

三二一

天地に宣る

四二三

倭をぐな

四四三

拾遺

五七七

跋 文

山本健吉 七六三

著者年譜

岡野弘彦 七九一

解 題

八〇九

歌集別總目次

八二五

作品初句索引

八三三

釋迢空短歌綜集

海やまのあひだ

〔海やまのあひだ〕

○大正十四年五月三十日、改造社より（現代代表短歌叢書）第五篇として刊行。四六判、二六六頁。定價一圓八十錢。裝幀森田恒友。

○明治三十七年頃より大正十四年（作者十七歳より三十八歳）までの作品六九一首を、逆年順に収める。

○本書は、この初版本を底本にしているが、のちに昭和四年五月、多少の訂正改變を加えて改造文庫第二部五十九篇として再刊、折口信夫全集廿一卷に収められたものはこの文庫本を底本としている。

大正十四年 — 一首 —

この集を、まづ與へむと思ふ子あるに、

かの子らや われに知られぬ妻とりて、生きのひそけさに わびつゝをるむ

大正十三年 — 五十二首 —

島 山

葛の花 踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり

谷々に、家居ちりぼひ ひそけさよ。山の木の間に息づく。われは

山岸に、晝を 地蟲ヂムシの鳴き満ちて、このしづけさに 身はつかれたり

山の際サヘの空ひた曇る さびしさよ。四方の木キむらは 音たえにけり

この島に、われを見知れる人はあらず。やすしと思ふあゆみの さびしさ

わがあとに 歩みゆるべずつゞき来る子にもの言へば、恥ぢてこたへず

ひとりある心ゆるびに、島山のさやけきに向きて、息つきにけり

ゆき行きて、ひそけさあまる山路かな。ひとりごゝろは もの言ひにけり

もの言はぬ日かさなれり。稀に言ふことばつたなく 足らふ心

いきどほる心すべなし。手にすゑて、蟹のはさみを もぎはなちたり

澤の道に、こゝだ逃げ散る蟹のむれ 踏みつぶしつゝ、心むなしもよ

いまだ わが ものにさびしむさがやまず。沖の小島にひとり遊びて

蟹の家 隣りすくなみあひむつみ、湯をたてにけり。荒磯アライのうへに

ゆくりなく訪ひしわれゆゑ、山の家アライの雛の親鳥は、
くびられにけむ

鶏の子の ひろき屋庭に出であるが、夕焼けどきを過ぎて さびしも

蟹の村

網曳^{アビ}きする村を見おろす阪のうへにぎはしくして、さびしくありけり

磯村へますぐにさがる山みちに、心ひもじく波の色を見つ

すこやかに網曳^{アビ}きはたらく蟹の子に、言はむことばもなきがさぶしさ

蟹をのこあびき張る脚すね長に、あかき禪^{セン}高く、ゆひ固めたり

あわびとる蟹のをとこの赤きへこ目にしむ色か。浪がくれつゝ

蟹の子のかづき苦しみ吐ける息を、旅にし聞けば、かそけくありけり

行きずりの旅と、われ思ふ。蟹びとの素肌のにほひまさびしくあり

赤ふどしのまあたらしさよ。わかければ、この蟹の子も、ものを思へり

蟹の子やあかきそびらの盛り肉^づの、もり膨れつゝ、舟漕^{ふね}ぎにけり

あぢきなく 旅やつぶけむ。蟹が子の心生きつゝはたらく 見れば

蟹をのこのふるまひ見れば さびしさよ。脛長々と 砂のうへに居り

船べりに浮きて息づく 蟹が子の青き瞳は、われを見にけり

蟹の子のむれにまじりて經なむと思ふ はかなごゝろを 叱り居にけり

山

若松のみどりいきるゝ山はらに、わが足おとの いともかそけさ

目のかぎり 若松山の日のさかり 遠峰とみねの間の空のまさ青さ

田向ひに、黒檜ビたち繁シむ山の崎 ゆたになだれて、雨あるに似たり

氣多川

きはまりて ものさびしき時すぎて、麥うらしひとつ鳴き出でにけり

麥うらしの聲 ひさしくなきつげり。ひとつところの、をぐらくなれり

むぎうらし ひとつ鳴き居し聲たえて、ふたゝびは鳴かず。山の寂けさ

ふるき人 みなから我をそむきけむ 身のさびしさよ。むぎうらし鳴く

麥うらしは、早蟬。鳴いて、麥にみを入れる、と言ふ考へからの名。

山中やまに今日はあひたる 唯ひとりのをみな やつれて居たりけるかも

にぎはしく 人住みにけり。はるかなる木むらの中ゆ 人わらふ聲

これの世は、さびしきかもよ。奥山も、ひとり人住む家は さねなし

氣多タ川のさやけき見れば、をち方のかじかの聲は しづけかりけり

ひるがほのいまださびしきいろひかも。朝の間と思ふ日は 照りみてり

あさ茅原^{チハラ} つばな輝く日の光り まほにし見れば、風そよぎけり
家裏に 鳴きつゝうつる鶏の聲。茅の家壁^ヤを風とほり吹く

夜

啼き倦みて 聲やめぬらし。鴉の止^スへる木は、おぼろになれり

山の霧いや明りつゝ 鴉の 唯ひと聲は、大きかりけり

鴉棲^カる梢 わかれずなりにけり。山の夜霧はあかるけれども

さ夜ふけと 風はおだやむ。麓べの澤のかや原そよぎつゝ聞ゆ

山中^{ナカ}は 月のおも昏^クくなりけり。四方のいきもの 絶えにけらしも

山深きあかとき闇や。火をすりて、片時見えしわが立ち處^ドかも

山住み

夕かげのあかりにうかぶ土の色。ほのかに 靄は這ひにけるかも

ほのぐと 道はをぐらし。土ぼこり踏みしづめつゝ われは來にけり

青々と 山の梢のまだ昏れず。遠きこだまは 岩たゞくらし

はたごの土間に 餌をかふつばくらめの 聲ひそけさや。人おとはせず

をとめ一人 まびろき土間に立つならし。くらき聲にて、宿せむと言ふ

大正十二年 ——三十首——

十二月二十七日

あまつ日の み冬來向ふ色さびし。わが大君はものを思へり

霜月の 日よりなごみの あまりにも寂けき空の したおぼゝしも

木地屋の家

うちわたす 大茅原となりけり。茅の葉光る暑き風かも

鳥の聲 遙かなるかも。山腹づの午後の日ざしは、旅を倦ましむ

高く来て、音なき霧のうごき見つ。木むらにひぶく われのしはぶき

篤す深き山澤遠き見おろしに、轆轤ろこ音して、家ちひさくあり

澤なかの木地屋キヂヤの家にゆくわれの ひそけき歩みは 誰知らめやも

山々をわたりて、人は老いにけり。山のさびしさを われに聞かせつ

夏やけの苗木の杉の、あかくと つぶく峰ミネの上ゆ わがくだり來つ

山びとは、轆轤ひきつゝあやします。わがつく息の 大きと息を

誰びとに われ憚りて、もの言はむ。かそけき家に、山びとゝをり